

## 現地を訪問して想うこと

1972年 法学部卒 大川 昌利

「逃げろというオペレーションより、戻れというオペレーションの方が難しい」福島県川内村村長の言葉は、今回のツアーで一番心に残った言葉である。

我が母校で東北大震災の応援ツアーがあるという知らせが来た。私は、是非とも福島にまず、行きたかった。福島原発で爆発、放射能漏れという被害、また、それに伴う風評被害という目に見えない敵とどのように戦っているのか、少しでも体感して、福島県民の思いに近づきたいと思ったからである。単なる観光ツアーでなく、目にしたもの、耳で聞いたもの、肌で触れたものなど五感を通して学んだことを広めていくことができればと思ったからである。

第1日目は、B1グランプリの会場ともなっていた郡山から、出発した。大型の観光バスに乗り移動した。川内村にむかう道路から見える山里は、人がいるのかいないのかわからない状態に見えた。ときおり、黒やブルーの大きな袋が見えた。あれが除染した土が入っている袋なのだ。いくつもいくつも点在していた。これが、戻れというオペレーションの方を難しくしていることの一つということか。

いわなの郷体験交流館に案内された。森林の木材を十二分に活用されたその交流館で、川内村遠藤雄幸村長のエネルギーな話は、まさしく伝道者のようであった。川内村が全村避難して、村へ戻るができるようになり、今後どのような村づくりを進めていくかという、現状と課題についての話は、もうすぐ阪神淡路大震災20年目を迎える私たちにとって、他人事とは思えないものがあつた。

その中で、村に住み続ける誇りや意義をどう取り戻していくか、補償をさせることは重要だが、生きる意欲や目標を見失わないこと、戻る'戻らないという対立構図は作らないというまとめは、本当に自分に言い聞かせているようで、胸に熱いものを感じた。

この原稿を書いている際にも、長野県北部で震度6弱という地震や阿蘇のマグマ噴火が起こっている。日本は、地震列島ということをおぼえてはいけないのだ。

平成26年10月18日)、19日(日)